

令和 2 年 7 月 12 日現在

機関番号：32618

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04370

研究課題名(和文) 希釈飲料作成による発達障害児の他者意図理解・協同活動アセスメントと支援方法の開発

研究課題名(英文) Development of the "Assessment and facilitating developmental program for understanding other intentions and cooperative activities by making diluted beverages"

研究代表者

長崎 勤 (Nagasaki, Tsutomu)

実践女子大学・生活科学部・教授

研究者番号：80172518

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：「希釈飲料作りによる他者意図理解・協同活動のアセスメント・支援プログラム」を開発し、その発達の妥当性を検証するために、2-6歳の38名の典型発達幼児を対象に、他者の欲求意図への関心と選択欲求質問の発達過程を分析した。この知見を参考に、知的障害幼児と自閉症児に本プログラムを適応した結果、他者の意図に関心を持ち、他者の欲求意図を言語で尋ねることが出来るようになった。また小集団の中で役割理解と分担によってカフェごっこもできるようになった。以上のことから典型発達児および障害児の両者とも、希釈飲料づくりという身近な生活活動の中で、大人との関わりを通して他者意図理解・協同活動が促進される可能性が示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子供たちが他者の感情や考えを理解していくことは、子供が教室や地域社会で豊かな生活をするためには不可欠であるが、現代社会においてはこのような「心の理解」の発達が困難になってきている。本研究は、典型発達児および障害児の両者ともに、希釈飲料づくりという身近な生活の活動での大人との相互交渉によって他者意図理解・協同活動が促進され、社会性の基盤が促される可能性が示されたといえる。

研究成果の概要(英文)：In order to develop and validate the developmental validity of the "Assessment and facilitating developmental program for understanding other intentions and co-operative activities by making diluted beverages," the developmental processes of interest in the desire intentions of others and choice desire questions were analyzed in 38 typically developing children aged 2-6 years. Based on these findings, the adaptation of this program to intellectually disabled infants and children with autism resulted in the ability to be interested in the intentions of others and to verbally inquire about the intentions of others' desires. They also learned to play cafe in small groups by understanding and sharing their roles. From the above, it was shown that both typically developing children and children with disabilities can promote understanding of others' intentions and cooperative activities through their relationship with adults in the familiar life activity of making diluted drinks.

研究分野：教育心理学

キーワード：他者意図理解 協同活動 希釈飲料づくりによる発達支援 ダウン症児 自閉症児 入門的調理活動 大人との相互交渉

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

1) 発達障害児の他者意図理解・協同活動のアセスメントと支援の必要性

近年、発達障害児の増加が指摘され、児童生徒の 6.5%にものぼることが報告されている(文科省、2012)。発達障害児では、他者の意図を理解し相互作用をすること、また意図を共有した協同活動(co-operative activity)が困難で、社会的活動を制限することになるといわれている。平成 28 年には障害者差別解消法が施行され、社会参加を支える合理的配慮が求められている。そのため、他者意図理解・協同活動をアセスメントし、支援する方法の開発が急がれている。欧米では、全米科学者会議の提案から、自閉症スペクトラム児者(以下 ASD)の教育の優先課題として、生活の中でのコミュニケーション活動や自発性があげられており(NRC,2000)、それに基づいた SCERTS モデル(Prizant ら,2010)などの支援方法も開発されている。日本でも日本の文化や地域性に基づいた意図理解や協同活動の支援方法の開発が求められている。

2) 日常生活の中での他者意図理解・協同活動のアセスメントと支援方法の開発の必要性

申請者らはこれまで、科研費を得て、スクリプトを用いた支援(長崎ら,1999)、初期社会性発達支援プログラム(長崎ら,2009)を開発し、図書として刊行してきた。これらの研究によって、文脈を構造化し、標的とする要素について言語理解と表出を段階的に援助していく方法、また生活の中での社会性についての総合的なアセスメントと支援方法を開発し、成果をあげてきた。

しかし、他者意図理解・協同活動のアセスメントと支援方法の開発、図書刊行はできていなかった。他者意図理解・協同活動の支援に適した生活場面が少なかったためである。

その様な中、田島ら(2014)は、幼児の親子による 3 回の希釈飲料(商品名は「カルピス」など)作りの過程を分析し、子どもが徐々に大人の好む濃さや量に応じて自分の行動を調整し、大人に対して希釈飲料を作れるようになる発達プロセスを観察している。この入門的調理活動ともいえる親子による希釈飲料作りは、他者意図理解・協同活動、および自己調整活動の発達課題が総合的に「文脈に埋め込まれた活動(Lave and Wenger,1991)」であるといえよう。

一方、幼児の ASD では、他者のための希釈飲料を作るのが困難、中学生の ASD では、他者に希釈飲料の好みを尋ねることが困難、などの事実が示され(長崎、2016 の予備観察)、発達障害児の社会的活動の場を広げ、就労にも結びつくものと考えられる。

よって、希釈飲料づくりは発達障害児の他者意図理解・協同活動支援に適するものと考えられる。

2. 研究の目的

【研究 1】希釈飲料作りによる他者意図理解・協同活動のアセスメント・支援パッケージ・プログラム(Package of Assessment and intervention using co-cooking of Conked drink(PACC)) の作成。

パッケージ・プログラムは以下の 7 つのステップから構成される。

【研究 2】典型発達児における希釈飲料づくりの発達経過の分析。

典型発達児 2,3,4,5,6 歳児、計 38 名に対し、アセスメント・支援パッケージ(PACC)のステップ ~ ステップ を適用し、達成度を測定し、ステップの妥当性を検討する。

【研究 3】実践指導

ダウン症児、自閉症児を対象に、実験的支援を行い、パッケージ・プログラムの妥当性を検討 する。

【研究成果の刊行】

以上の研究成果を図書と DVD として刊行し、多くの家族・専門家に使って頂く。

3. 研究の方法

7 つのステップ(希釈飲料を自分に作る、他者に作る、自分の好みを表す、他者の好みに関心を持つ、他者の好みを尋ねる、決められた役割に従って小集団でカフェを楽しむ、小集団でプランし、役割を決めて、皆でカフェを楽しむ)からなる希釈飲料作りによる他者意図理解・協同活動のアセスメント・支援パッケージを作成する(【研究 1】)。次に、典型発達児において、本パッケージでの 5 水準の希釈飲料づくりがどのようにできるようになるかを観察し、本パッケージの妥当性を検討する(【研究 2】)。また、本パッケージにおける、幼児~中高生の発達障害児に適用し、継続的な実験的支援を行うことによって、本パッケージの妥当性を検討し、広く療育・教育現場で使えるようにする(【研究 3】)。

4. 研究成果

1) 【研究 1】希釈飲料作りによる他者意図理解・協同活動のアセスメント・支援プログラム

(Package of Assessment and intervention using co-cooking of Conked drink(PACC)) の作成。

A. 以下の 7 つのステップからなるアセスメント・支援パッケージを開発した(Table1; 長崎・天野・吉井,2018)

ステップ- :作ってもらって楽しむ/自分で作って楽しむ(定型発達 1-2 歳、以下同様)。[自分に向かった目標の共有]

ステップ- :母親(相手)に作ってあげて楽しむ。母親の要望に応じて、量を調整する(初期調整活動)。(2-3 歳)[他者に向かった目標の共有]

ステップ- :自分の好み(欲求・味覚)を表す。[自己意図の表出]

ステップ- : 他者の好み (欲求・味覚)に関心を持つ。(2-3 歳)[他者の意図への関心]

ステップ- : 他者の好み (欲求・味覚)を尋ねる。(非言語で尋ねる/言語で尋ねる)(3-4 歳)[他者意図の理解]

ステップ- : 決められた役割に従って小集団でカフェをする。(5-6 歳)[協同活動(受動)]

ステップ- : 小集団でプランし、役割を決めて、カフェを楽しむ。(7-9 歳)[協同活動(能動)]

ステップ	発達水準	目的	場面
I	1-2 歳	作ってもらって楽しむ/自分で作って楽しむ。 [自己に向けた目標の共有]	子ども 補助指導者
II	2-3 歳	母親(相手)に作ってあげて楽しむ。 母親の要望に応じて、量を調整する(初期調整活動) [他者に向けた目標の共有]	指導者 母親
III	2-3 歳	自己の好み(欲求・味覚)を表す [自己意図の表出]	
IV	2-3 歳	他者の好み(欲求・味覚)に関心持つ ・MTが母親に好みを尋ねるのを注目するどっち? [他者意図への関心]	どっち? (III)
V	3-4 歳	他者の好み(欲求・味覚)を尋ねる。 ・非言語で尋ねる ・「(白とオレンジ)どっち?」と言語で尋ねる [他者意図の理解]	どっち?
VI	5-6 歳	決められた役割に従って小集団でカフェをする。 [協同活動(受動)]	
VII	7-9 歳	小集団でプランし、役割を決めて、カフェを楽しむ [協同活動(能動)]	注文は? ゲスト ウェイター ブレンダー



B. スクリプトの構成

C. アセスメントと支援計画のためのシート作成

1) アセスメント

全要素を理解様子と表出要素に分け、以下の段階的援助の水準によって評価する。

【理解要素の水準】: 大人からの 行為・意図の言語化、モデル提示、身体援助、指差し・ジェスチャー、声かけ、言語指示、自発(「おやつだよ」で椅子を運びはじめするなど)

【表出要素の水準】: 大人の関わりを期待して待つ、大人への視線、指差し・ジェスチャー、発声、模倣、自発語(部分)、自発語(全体)を設定する。(「白とオレンジの希釈飲料原液のどっちがいい?」と尋ねられオレンジを選ぶなど)

2) 支援方法: 発達の最近接領域への支援 = 段階的援助(足場を作り 足場を外していく)

【理解要素】: 初期評価(BL)のアセスメントにより同定された水準(N)の、1つ上の段階(N+1)で大人が働きかけ、できなかったら元の段階(N)に戻して指導を行う。

【表出要素】: BLのアセスメントにより同定された水準(N)の、1つ上の水準(N+1)を目標として、手がかり援助(5秒間の遅延 モデル提示 身体援助)を行う。

D. 分析方法

a) 理解要素と表出要素の達成水準を記録する。

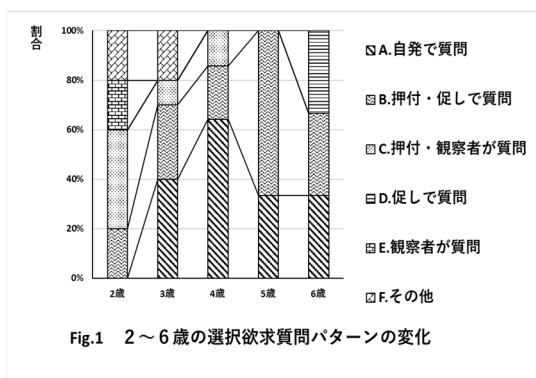
b) 達成水準の要素数を合計する。

c) 全要素数に対する各水準合計の割合を求め「理解要素における段階的援助の比率」「表出要素における段階的援助の比率」を算出し、その経緯を示す。

以上を、実践女子大学 研究推進機構ホームページ

https://www.jissen.ac.jp/society/research/join/join_4.html にアップした。

2) 【研究2】典型発達児における希釈飲料づくりの発達経過の分析 典型発達幼児(3~6歳)に対し、「希釈飲料作りによる他者意図理解・協同活動のアセスメント・支援パッケージ」のステップ- ~ を適用し、ステップの妥当性を検討した。対象は、2~6歳の典型発達児計38名(2歳5名, 3歳10名, 4歳14名, 5歳6名, 6歳3名)と保護者で、選択欲求質問の発達、および心の理解課題との関係を検討した。その結果、自発的な欲求選択質問は、3歳児から4歳児まで増加したが、5歳児では押しつけの後に促されて質問することが増加し、自発が減少した(Fig.1)。5歳児では自分でカルピスが作れるようになり、自分が作ったものを飲ませたいという自己主張が強く、押しつけるようになった可能性も考えられた。しかし、促されると質問することができたことから、「自己主張 他者からの調整に応じる」といったサイクルができることが推測される(天野, 2019)。



3) 【研究3】実践指導

<ダウン症児>

(1) ステップ - の指導

3-4 歳のダウン症児を対象にして、おやつ場面での言語・コミュニケーション支援の中で、「他者意図理解・協同活動のアセスメント・支援パッケージ・プログラム」[ステップ-]作ってもらって楽しむ 自分で作って楽しむ [ステップ-]相手に作って楽しむ[ステップ (2-3 歳)]自己の好みを表す(自己意図の表出)、の活動の後、指導者が母親やゲストの好みを尋ねる場面を設定し、[ステップ (2-3 歳)]他者の好みに関心持つ(他者意図への関心)による支援を行い、同時に家庭での心的状態語の使用の発達経緯を分析し、プログラムの妥当性の検討を行った。その結果、発話の模倣や自発語による表出が増加した(Fig.2)。また、他者意図理解では母親への注目が徐々に高まり、母親が選択したものを取れるようになり(Fig.3)、母親に対する意図理解が促進されたと考えられた(長崎・天野・吉井,2018;天野・長崎・吉井,2018)。

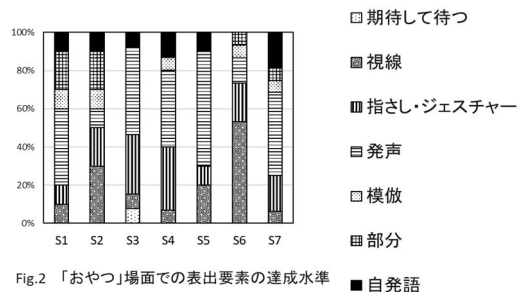


Fig.2 「おやつ」場面での表出要素の達成水準

(2)ステップ :言語・会話の支援

3-4 歳のダウン症児を対象にして、おやつ場面での言語・コミュニケーション支援の中で大人(指導者・母親)との会話を支援した。会話の支援は、共同注意場面での伝達行為への大人の代弁、リカスト(recast)等によって支援した。各発話について 伝達機能(要求、叙述等)・伝達手段(言語、原初語、喃語等)、言語・原初語は品詞を分析した。ターンテーキング、会話プロトコルを記述した。

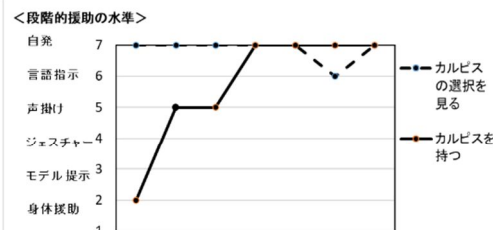


Fig.3 母親の選択への注視・選択したカルピスを持つ

その結果、①伝達機能・伝達手段:要求や叙述が約 60%を占めていた。視線やジェスチャーでの伝達は減少し、喃語や原初言などの発話による手段が増加した。②語彙:セッション(以下 S)1 では名詞、その他の割合が約 70%を占めたが、次第に動詞、形容詞、代名詞の割合が増加した(Fig.4)。③ターンテーキング・会話:ターンテーキング数は S1 S9 にかけて約 2 倍に増加した(Fig.5)。会話プロトコルでは、S1 では補助指導者(ST)の「もう少し入れようか」の要求・指示に応じカルピスを増やす調整活動が見られた。S6 では ST の「どう? いい?」という質問に対し、A 児は「うん、濃い」と応え水を加える調節活動が見られた。家庭では 4 歳 1 ヶ月頃から二語文が見られ始め、100 語彙調査(4 歳 7 ヶ月)では理解 93 語、表出 66 語となった。これは、意味のある原初語・言語が増え、声に出して相手に伝達意図を伝えたいという意欲が高まったためと考えられる。また、会話ではやりとりの長さが伸びるとともに、単に指示に応じるだけの会話から、自分の行為を調整しながら発話する会話が見られ、会話能力の一段階の発達が見られた。おやつ・希釈飲料づくりでの言語指導の可能性が示唆された(天野・兵藤・鈴木・吉井・長崎,2019)。

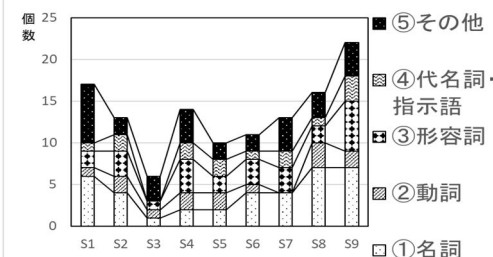


Fig.4 異なり語彙の増加と品詞

(3)ステップ :他者意図理解の支援

4-5 歳のダウン症児を対象にして、おやつ場面での言語・コミュニケーション支援の中で、前期には支援目標が音声言語での選択欲求質問になりがちであり、相手の意図を尋ねる意識が乏しかったとの振り返りから、後期では、相手に向かってメニューを差し出すことを目標とした。その結果、自発的に相手にメニューを差し出し(Fig.6)、徐々に音声言語でも尋ねられるようになってきた(Fig.7)。相手に「メニューを差し出す」という意図的伝達行為(illocutionary act)によって、「今から、尋ねますよ」という相手の意図を尋ねる発話の含意

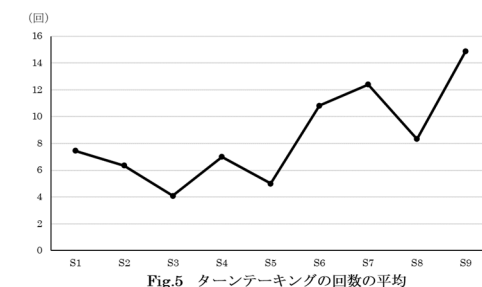


Fig.5 ターンテーキングの回数の平均

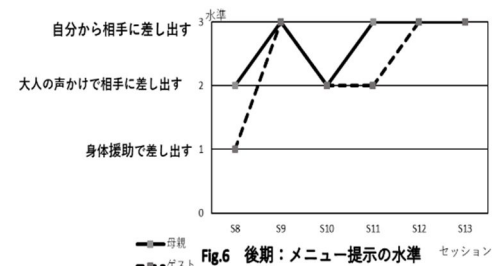


Fig.6 後期:メニュー提示の水準

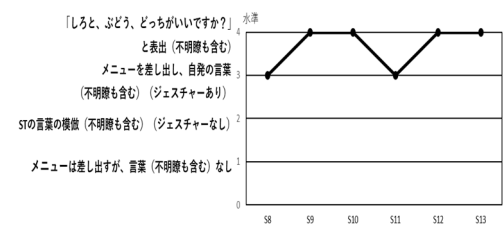


Fig.7 母親に選択欲求質問をする

(implication)を非言語的に知らせるようになったと考えられる。相手への「押しつけ」は、典型発達児3歳児でも見られ(天野,2019)、他者意図理解の発達の上であるといえよう。「心の理解」発達におけるパフォーマンスの重要性が示唆された(天野・兵藤・吉井・長崎,2019)。

(4)ステップ :カフェごっこにおける役割理解と協同活動の発達支援

5-6歳のダウン症A児を対象に、カフェごっこ場面を設定し、ウェ이터、コック、カスタマーの役割の中からA児が自ら選択し、役割を遂行した。後期の、ウェ이터役では、自発・言語指示がS8に向けて増した。S8では自発・言語指示が9割近くを占めた(Fig.8)。役割理解や他者意図理解が可能になり、カフェごっこという協同活動の基盤ができつつあると考えられる(村井,2019)。

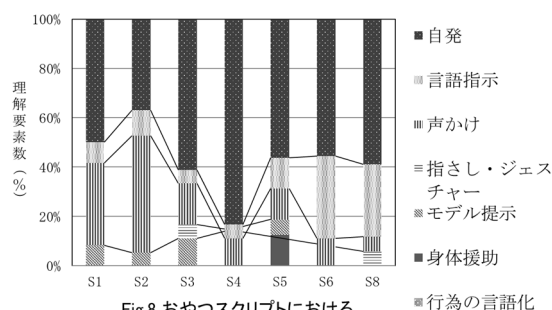


Fig.8 おやつスクリプトにおけるウェ이터役での理解要素の段階的援助の水準割合

<自閉症児>

(5)ステップ :他者意図理解の支援

小学部1年生の自閉症児を対象に、カフェごっこにおいて、他者の好みを尋ねる欲求選択質問の支援を行ったところ、希釈飲料の味の種類や濃淡、ストローの色などを尋ねられるようになった。自閉症児においてもスクリプトを設定し、支援を行うことによって、他者の関心に合わせたコミュニケーションが可能になることが示された(吉村・青木・井口・吉井・長崎,2019)。

(6)ステップ :他者意図理解の支援・決められた役割に従って小集団でカフェを楽しむ。

特別支援学校中学部の14歳のASD児(店員役)が希釈飲料を作ってゲストの仲間提供する「カフェ」スクリプトによる支援を行った。支援の結果、対象児は希釈飲料の種類や味の濃淡やストローの色について、自発的に仲間の好みをたずねることができるようになった。これらから希釈飲料づくりの「カフェ」スクリプトは、ASD児と仲間とのコミュニケーションを促進する際の契機になると考えられた(吉井・青嶋・森・中込・長崎,2019)。

【研究成果の刊行】

以上の研究成果を図書とDVDとして刊行し(長崎・田島・吉井,2020;長崎・吉井・若井,2019)、多くの家族・専門家に使って頂く。

【まとめ】

典型発達児においても、障害児においても、希釈飲料づくりという身近な生活の活動の中で、大人との関わりを通して、他者意図理解・協同活動が促進される可能性が示された。

<引用文献>

天野美緒・長崎 勤・吉井勘人(2018).希釈飲料作成による発達障害児の他者意図理解・協同活動のアセスメントと支援方法の開発(2) - ステップ :自己の好みを表す、 :他者意図への関心、および心的状態語の発達 - 日本発達心理学会第29回大会論文集,148.

天野美緒・兵藤瑞穂・鈴木はるみ・吉井勘人・長崎 勤(2019).包括的発達支援プログラムの開発と実践(3) - 4歳ダウン症児への希釈飲料づくりを通じた会話の発達支援 - 日本発達心理学会第30回大会論文集, P57-1.

天野美緒・兵藤瑞穂・吉井勘人・長崎 勤(2019).包括的発達支援プログラムの開発と実践(6) 「カルピス」づくり場面での選択欲求質問をとした「心の理解」の発達支援 日本特殊教育学会第57回大会論文集, P7-35.

天野美緒(2019).典型発達幼児の希釈飲料づくりにおける他者意図理解の発達 選択欲求質問の分析 実践女子大学生生活科学部生活文化学科 2018年度卒業論文(未発表).

村井麻理絵(2019).ダウン症児に対する「カルピス」づくりを通じた協同活動の発達支援 実践女子大学生生活科学部生活文化学科 2018年度卒業論文(未発表).

長崎 勤・天野美緒・吉井勘人(2018).希釈飲料作成による発達障害児の他者意図理解・協同活動のアセスメントと支援方法の開発(1) - 背景と他者意図理解・協同活動発達支援プログラム - 日本発達心理学会第29回大会論文集,147.

長崎 勤(総監修)吉井勘人・若井広太郎(監修)(2019).シリーズDVD:発達の障害と特別支援教育.(株)サン・エデュケーショナル.

長崎 勤・田島信元・吉井勘人(編著)(2020).食育を通じたコミュニケーション発達支援 - 「カルピス」づくりによる支援プログラム - 福村出版(印刷中).

吉井勘人・青嶋由美・森秀昭・中込昭彦・長崎勤(2019).「カフェ」スクリプトを用いた自閉スペクトラム症児と仲間とのコミュニケーション支援 教育実践学研究(山梨大学教育実践総合センター研究紀要),pp37-46.

吉村彩瑛・青木雄一・井口素笑・吉井勘人・長崎 勤(2019).ASD児への他者の関心に合わせた発話や行為遂行の支援 「希釈飲料を用いたカフェ」スクリプトを通して 日本特殊教育学会第57回大会論文集, P5-32.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 森澤亮介・吉井勘人・長崎勤	4. 巻 29
2. 論文標題 自閉スペクトラム症児への協同活動発達支援：パートナーの役割遂行に対する情報提供と要求の習得を通して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 発達心理学研究	6. 最初と最後の頁 53-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 吉井勘人・青嶋由美・森秀昭・中込昭彦・長崎勤	4. 巻 24
2. 論文標題 「カフェ」スクリプトを用いた自閉スペクトラム症児と仲間とのコミュニケーション支援	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 山梨大学教育実践総合センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 37-46
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 高橋桂子 数野千恵子 牛腸ヒロミ 細江容子 須賀由紀子	4. 巻 5
2. 論文標題 『新選家政学』を読み解く（その1）	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 下田歌子記念女性総合研究所年報	6. 最初と最後の頁 35-53
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34388/1157.00002051	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 長崎 勤・鈴木はるみ・三角幸恵	4. 巻 第1号
2. 論文標題 包括的発達支援プログラムの開発 リレー・ゲームによる協同活動・コミュニケーションの発達支援	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 実践女子大学教職課程年報	6. 最初と最後の頁 55-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 兵藤瑞穂・若井広太郎・吉井勘人・板倉達哉・長崎勤	4. 巻 第3号
2. 論文標題 保育場面の自閉症スペクトラム幼児と他児・保育者との関わりのアセスメントと支援方法の基礎的研究 子ども・保育者との相互交渉に関するタイムサンプリングを中心に	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 実践女子大学教職課程年報、	6. 最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件)

1. 発表者名 長崎勤・兵藤瑞穂・天野美緒・鈴木はるみ
2. 発表標題 包括的発達支援プログラムの開発と実践 (1) 「カルピス」づくりによるコミュニケーションと他者意図理解の発達支援
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56会回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 鈴木はるみ・八嶋佐紀子・長崎 勤
2. 発表標題 包括的発達支援プログラムの開発と実践 (2) ダウン症児におけるタンバリン遊びによるリズムパターンの獲得の支援
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56会回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 天野美緒・兵藤瑞穂・鈴木はるみ・吉井勘人・長崎勤
2. 発表標題 包括的発達支援プログラムの開発と実践 (3) - 4歳ダウン症児への希釈飲料づくりを通じた会話の発達支援
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 鈴木はるみ・長崎勤・吉井勘人
2. 発表標題 包括的発達支援プログラムの開発と実践(4) - 3歳ダウン症児へのスネアドラムとピアノの即興演奏(improvisation)での注視行動と循環反応の促進による対人的自己効力感と意図伝達の発達支援
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長崎 勤・鈴木はるみ・兵藤瑞穂・天野美緒・吉井勘人
2. 発表標題 包括的発達支援プログラムの開発と実践(5) 劇遊びによる自己理解・ストーリー理解・意図理解・協同活動の発達支援 : 「おおきなかぶ」のパネルシアターから劇へ -
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 見田里緒・日戸由刈・原郁子・地内亜紀子・長崎 勤
2. 発表標題 自閉症スペクトラム児における会話の特性 自然な会話での会話の関連性と会話検査との分析を中心に
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長崎 勤・深澤雄紀・岩附敦史・高橋和子・西山剛司
2. 発表標題 学校現場における自閉症への情動調整の支援 教師の関わり方を変えることで、相互に変わる「気持ちの動き」と行動
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会自主シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉井勘人・竹内嘉恵・若井広太郎・原満登里・中西郁・長崎勤
2. 発表標題 自閉症児における社会性の発達アセスメントと支援 身体の動きの共有、模倣、共同注意、仲間との相互作用、自己表現・理解に焦点を当てた特別支援学校の授業実践
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会自主シンポジウム
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 若井広太郎・熊谷高幸・柳岡開地・森澤亮介・鍋谷梨恵・長崎勤・関戸英紀・吉井勘人
2. 発表標題 地域生活を目指したソーシャルスクリプトを用いた支援 スクリプトの発達と心の理論
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大会自主シンポジウム
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 長崎勤・吉井勘人・若井広太郎・深澤雄紀・兵藤瑞穂・天野美緒・板倉達也・熊谷高幸
2. 発表標題 自閉症スペクトラム児の社会性支援をめぐる-保育・教室での「社会性不要論」と「社会性=集団行動論」の断絶を超えて
3. 学会等名 日本発達心理学会第30回大会ラウンドテーブル
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長崎 勤・天野美緒・吉井勘人
2. 発表標題 希釈飲料作成による発達障害児の他者意図理解・協同活動のアセスメントと支援方法の開発(1) - 背景と他者意図理解・協同活動発達支援プログラム -
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 天野美緒・長崎 勤・吉井勘人
2. 発表標題 希釈飲料作成による発達障害児の他者意図理解・協同活動のアセスメントと支援方法の開発(2) - ステップ : 自己の好みを表す、 : 他者意図への関心、および心的状態語の発達 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第29回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉井勘人
2. 発表標題 地域スポーツ活動における特別な教育的支援を要する児童と周囲児との相互的関わり.
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 兵藤瑞穂・若井広太郎・吉井勘人・板倉達哉・長崎 勤
2. 発表標題 インクルーシブ保育での自閉症児と他児との関わり方の支援における保育者の役割(1) - 子ども間のコミュニケーション・ブレイクダウンと修復のアセスメント方法
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉井勘人・兵藤瑞穂・板倉達哉・若井広太郎・長崎 勤
2. 発表標題 インクルーシブ保育での自閉症児と他児との関わり方の支援における保育者の役割(2) - 子ども間のブレイクダウン時における保育者の関わり方の分析
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 吉村彩瑛・青木雄一・井口素笑・吉井勘人・長崎 勤
2. 発表標題 ASD児への他者の関心に合わせた発話や行為遂行の支援 「希釈飲料を用いたカフェ」スクリプトを通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57会回
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 天野美緒・兵藤瑞穂・吉井勘人・長崎 勤
2. 発表標題 包括的発達支援プログラムの開発と実践(6) 「カルピス」づくり場面での選択欲求質問をととした「心の理解」の発達支援
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57会回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 長崎 勤・天野美緒・兵藤瑞穂・吉井勘人
2. 発表標題 包括的発達支援プログラムの開発と実践(7) 劇遊びによる自己理解・ストーリー理解・意図理解・協同活動の発達支援 :5歳ダウン症児への「3匹の子ぶた」による支援 -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57会回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Nagasaki,T., Yoshii,S. Hyodo,M.,& Amano,M.
2. 発表標題 A facilitating developmental program of communication for children with developmental disorders using co-cooking activities. (Poster)
3. 学会等名 XVI European Congress of Psychology July 2-5 2019, Moscow, Russia (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大槻 美智子・若井広太郎・青木雄一・吉井 勘人・長崎 勤
2. 発表標題 共同注意・スクリプトを感覚過敏の視点で捉え直す
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57会回大会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計7件

1. 著者名 藤野博、本郷一夫	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 128
3. 書名 コミュニケーション発達の理論と支援	

1. 著者名 バリー・M・プリザント、トム・フィールズ-マイヤー、長崎勤、吉田仰希、深澤雄紀、香野毅、仲野真史、浅野愛子、有吉未佳	4. 発行年 2018年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 296
3. 書名 自閉症 もうひとつの見方	

1. 著者名 藤野博、本郷一夫、長崎 勤	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 128
3. 書名 コミュニケーション発達の理論と支援	

1. 著者名 柏崎秀子、長崎 勤	4. 発行年 2017年
2. 出版社 北樹出版	5. 総ページ数 177
3. 書名 改訂版 教職ベーシック 発達・学習の心理学	

1. 著者名 長崎 勤・田島信元・吉井勘人(編著)	4. 発行年 2020年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 -
3. 書名 食育を通じたコミュニケーション発達支援 - 「カルピス」づくりによる支援プログラム -	

1. 著者名 バリー・M・ブリザント、トム・フィールズ-マイヤー、長崎 勤(監訳)、吉田 仰希、深澤 雄紀、香野 毅、仲野 真史、浅野 愛子、有吉 未佳(翻訳)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 296
3. 書名 自閉症 もうひとつの見方	

1. 著者名 長崎 勤(総監修)・吉井勘人・若井広太郎(監修)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 (株)サン・エデュケーショナル	5. 総ページ数 5
3. 書名 シリーズDVD：発達の障害と特別支援教育	

〔産業財産権〕

〔その他〕

実践女子大学 研究推進機構
https://www.jissen.ac.jp/society/research/join/join_4.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	細江 容子 (Hosoe Yoko) (30272876)	実践女子大学・生活科学部・教授 (32618)	
研究分担者	吉井 勲人 (Yoshii Sadahito) (30736377)	山梨大学・大学院総合研究部・准教授 (13501)	